

【ポスター発表】

薬物依存症者を対象とした治療共同体エンカウンター・グループの意義について
—民間依存症回復支援施設におけるプログラム開発と質的分析—

○ 日本女子大学/国立精神・神経医療研究センター 氏名 引土絵未 (7570)

キーワード：依存症・治療共同体・プログラム開発

1. 研究目的

刑の一部執行制度の施行により、受け入れ先の一つとしてその役割を期待されているのが、民間依存症回復支援施設ダルクである。ダルクの成果についてはこれまでも挙げられているが、ダルク利用者の追っかけ調査の結果によれば、2年半後の利用者（確認の取れた退所者含む）の完全断薬率は65.4%とされ、非常に高い断薬率が示されている（嶋根ら2019）。しかし一方で、当事者コミュニティゆえの困難も指摘されている。利用者の多様化に伴い、ダルク終了後の社会復帰する場の不足やスタッフの確保、利用者の精神病症状への対応など支援における課題も積み上げられている。このようなダルクの抱える課題や困難に対して当事者の経験的知識に依拠する伝統的な手法だけではなく、新たな選択肢を提供しようとする動きがある。ワークブックを用いた集団薬物再乱用防止プログラムなどの認知行動療法や当事者研究、そして、治療共同体エンカウンター・グループ（以下EG）もその一つである。

治療共同体モデルの特徴は「手法としての共同体」であるとされ、「入所者自身が治療共同体における社会化と治療過程の変化のための媒介者となる」機能の重要性が挙げられる（De Leon2000）。その効果とともに世界各国で展開され、薬物依存症に対する代表的な中長期入所プログラムとして位置づけられることとなった（NIDA2015）。EGは、治療共同体モデルで実施されるグループワークの一つであり、治療共同体モデルの重要かつ基盤となる要素によって構成されており、それゆえに、治療共同体モデルにおいて象徴的なグループとされている（De Leon2000）。

筆者らは、これらのEGの効果検証として、2013年よりAダルク、2014年よりBダルク、2015年よりCダルク、2019年よりDダルクにてEGを導入すると同時に、自己実現尺度SEAS2000を用いた自記式アンケート調査を実施し、精神的健康度が高まっていることが示唆された（引土ら2014, 2018）。本研究では、量的変数では測定することができないEGの意義を明らかにすることを目的にインタビュー調査を実施する。

2. 研究の視点および方法

EGを実施するA・B・Cダルクにて定期的にEGに参加する利用者及びスタッフのうち、グループ参加期間が9ヶ月以上であり、調査の同意を得られた15名を対象にあらかじめ設定したインタビューガイドを基本に半構造化面接を実施した。所要時間は1時間前後であった。調査実施期間は2018年11月～2019年3月である。

これらの調査結果について、質的データ分析ソフト MAXQDA (Qualitative Date Analysis) を用いて分析を行なった。分析手順は以下の通りである。I C レコーダーで録音した音声データから逐語録を作成し、逐語録を MAXQDA にインポートした。MAXQDA にインポートした逐語録について、意味内容ごとに切片化し、ラベルをつけるコード化を行なった。これらの個別のコードを重ね合わせ、類似点や相違点に注意しながら、カテゴリーにまとめた。

3. 倫理的配慮

EGに参加する利用者に対し、調査の目的、個人の権利擁護および個人情報の保護に関して記載した研究説明書を用いて口頭で説明したうえで調査協力に同意した場合に同意書を得た。なお、施設へのEG導入に際しては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした調査依頼を実施していない。施設からEG導入希望があった場合にのみ、グループ導入および調査についての説明を実施し、同意を得られた場合に調査を実施した。本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号A2018-069）。

4. 研究結果

分析の結果、5つのカテゴリー（EGにおける変化、EGの特徴、EGのツール、ファシリテーション、EGの課題）と25のコードが生成された。本報告では、EGの効果に関連する2つのカテゴリー（EGにおける変化、EGの特徴）に着目した。EGにおける変化では、「内的変化」、「行動の変化」、「グループの変化」の3つのコードが、EGの特徴では、「大切にしている理念」、「プログラムにおけるEGの意味」、「直接的なコミュニケーション」、「日常生活に必要な道具」、「グループの力・相互作用」の5つのコードが生成された。

5. 考察

EGにおける変化のうち最も多く挙げられた「内的変化」は「課題に対する気づきを得られる」ことであった。自身では気づくことができなかつた課題に対する新しい見方や自分自身がどのように見えるのかということ了他者からフィードバックされることを通して、課題を整理していくことができることが挙げられた。また、このような気づきの前提となっているのが、「みんなに支えられて自分の感情が出せる」環境である。EGでは「物事の解決ではなく物事を取り巻く感情の解決」を指標として、エモーショナル・リテラシー（自身の感情を理解し、適切な形で表現できる力）（Steiner2003）の獲得を目指しているが、EGが安全に感情に向きあうツールとして活用されていることが示唆された。これらの変化の基盤となっているのが、EGの特徴である、「大切にしている理念」であり、言いっぱなし聞きっぱなし形式ではない「直接的なコミュニケーション」を安全に実施することを可能とし、「グループの力・相互作用」によりグループの効果を高めていると考えられた。

本研究の限界として、調査対象者が男性に限定されており、女性に対するEGの効果については明らかになっていないことが挙げられる。今後は、女性を対象とした治療共同体プログラムやEGの可否も含めた検討が必要となる。